

近世史部会

外城田綜合調査は、歴史研究会の自主的な研究活動として昨

年暮より計画され、一月三十日の予備調査を経て三月二十七日より一週間の予定で、資料採訪合宿が行われた。

外城田地域を綜合的に調査研究することは、我々学生には荷が重すぎると考える人があるかもしれない。たしかにこの一週間のみでそれを達成することは不可能である。

この地域が古代より神宮との関係に於て又中世には愛洲・北畠氏との関係に於て「伊勢」と呼ばれる地方に如何に重要な位置を占めたか、その沿革を見るだけでもこの調査研究が如何に困難なものであり、それだけにこの調査研究が重要であることと知るものである。その点よりしてもこの調査には多大の時間と学生の努力と血結が要請される。いふなれば歴史研究会にとつて大きな試金石と云える。この夜に當つて二十七日より行われた近世史部会の調査の中間報告を行うことは、これらの調査に意義あるものと確信する。

近世史部会は大略二十名の参加者があり中田先生の御指導の下に山神公民館に合宿して中村家太庄屋文書・山神文書・中村家蔵の三集中的に選抜、書き写しを行った。この作業は土地台帳組、社倉組、万才留組^(文書名)、地主・海防(浦組)組、その他一組と五組による分業的作業形態をとつた。

初日は字になれないせいもあり、能率はかんばしくなかつたが、二日目からは順調な運びであつた。和田先輩も南年奨から指導にきて下さり、意義ある判戦を与えて下さつた。

膨大な史料だけに、大略二十分の一を終つたのが合宿中の発掘結果である。

この一週間の山神女子青年団が炊事の用意をして下さつたの

で、我々は史料解説に精力を集中することを出発点。

土地名帳組は校地帳、名寄帳の分析を中心に山神村の土地保有形態と、農村ワフラーの歴史的形成と、社会組は多くある社会関係史料より村民政策の実態と、万才組は万才苗により農村構造の全般と、地士・海防組は地士制度の形成と、交遊并農兵組織の実態という問題点を、それらの組の連絡において追求してこうとする。そうしてその集積をもつて近世封建体制における外城田地方の特に山神村の農村構造を明らかにして行くこととするのが、我々の目的である。

次に向題提起として山神村の歴史の変遷にふれていこう。向題提起は勿論資料分析の過程の中で形成されるのが理想的と思うが、その基本線としての具体的なものを引出す雛形が必要と思ひ、ここに二、三それを紹介しよう。

(1) 山神村は中世に於ては族団的共同体として存立し、戦国期から近世初期にかけて、本百姓の「柱立」分出が行われ、山神村として近世大名制（紀伊封建体制）の中に編入されたものか、又は大南探地を契機として大名制の細胞となつたものであるか、結言すれば通史の点で、又畿内末端地域としていかなる範囲（一般的に）入るものであろうか。

(2) 水を中心にしたような条件で農村経営が行われていたか（多くある水（池、井、溝）は中村家又は山神共同体とどのような関係にあるか）

(3) 農村経済を代表する畑作物（自給・交換を兼た）は、農業技術とどのような関連で発達したか。

(4) 地士の農村統制の具体的実証とその実体、又、農兵組織（

浦組）は、いかなる時点で形成されたか。

(5) 割地農民の形成（株改）と、厂家的意義は（地主化防止か）

(6) 社会の意義とその存在条件の解明

以上、大体(1)～(6)までの抽象的向題提起を試みたが、これでは十分とは言えないし、さらに全般的に史料と対面しつつ、具体的に提起されなければならぬと思う。向題提起は「史学」という立場に立てば、いかに小さな問題でもそれを削除することはできない。それを考えると、だしかにこの向題提起は十分ではないが、次にあける史料項目紹介により理解していただく。

○万才苗（元禄一 幕末） ○新田畑名寄帳（宝永五年）

○勢州渡会郡山神村御換地帳（文禄三 申 午 年） ○勢州田丸領

山神村名寄帳（慶安五年） ○山神村之内紀州御領分百姓地株

改帳（元禄十三年） ○名寄改高取増減目録（元禄十五年）

○田畑分ヶ地并舊地売買相改帳（元禄十五年） ○持地田畑并

入筋帳（文化十一年中村家内帳） ○下作斗代米并手取改帳（中村家 寛政3・4・5・7・8・10・11・12年、文化9・11・12・13

・14年、文政元6・9・10・11年、天明6年、享和3・9年）

○社会御勘定帳扣一巻入（文久元・2） ○衆門改一件帳へ弘

化2年） ○由稽書抜并勤方拜領書抜（明治元）

○地士帯刀人格録有之筋共調べ帖（文政二年） ○地士相統書

上帳（文政二年）

以上山神文書の一部紹介を行つたが、これは多い史料から一部抜萃したものである。さらにこれから機会をみて具体的に史料の紹介を行つていこうと思うが、それ以上に知らんと欲する

人は又その他學問に情熱を拂つてゐる方々は、大いに参加していただきたいと思ふ。そうしてこれらの史料を十分利用していただき、研究を深めていただきたい。我々は出来る限りこれからさらに深く研究活動を行い、この研究目的を達成せんために努力せんとするものである。近由には五月の飛石連休（Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ日）に、山神村に史料探訪に行き、更に今後の研究活動として夏休みに史料探訪の予定が立てられている。甚だ概略的ではあるが、これをもつて中間報告とする。

（文責 九期生 一名古）